

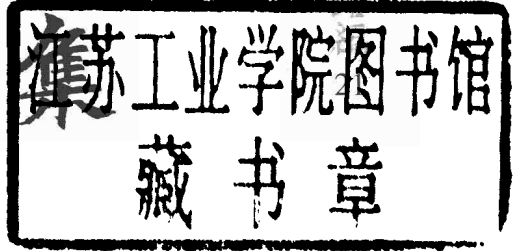
硯友社文学集



新日本古典文学大系 明治

新日本古典文学大系 明治

硯友社文学



山田有策

猪狩友一校注

宇佐美毅

岩波書店刊行



硯友社文学集

新日本古典文学大系明治編
21

二〇〇五年一月二七日 第一刷発行

校注者 山田有策 やまだ ゆうさく
猪狩友一 いかりともかず
宇佐美毅 うさみなげし

発行者 山口昭男

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋二五十五
案内 〇三至 10-8000

電話
<http://www.iwanami.co.jp/>

© 山田有策・猪狩友一・宇佐美毅 1005

Printed in Japan
ISBN4-00-240221-5

凡 例

一 底本はそれぞれの通りである。

『硯友社文学運動の追憶』 『早稲田文学』 大正十四年六月・七月、大正十五年四月号の初出。

『嘲笑小説天狗』 活版非売本『我楽多文庫』第九集(明治十九年十一月一日)、第十集(同年十二月一日)、第十一号(同二十年一月十六日)、第十二号(同年六月)、第十三号(同年七月)の初出。復刻版・硯友社系雑誌集成1『我楽多文庫(活版非売本)』(ゆまに書房、昭和六十年)を参照した。

『骨は独逸肉は美妙』 花の茨、茨の花』 活版非売本『我楽多文庫』第十二号(明治二十年六月)、第十六号(同二十一年二月)の初出。口絵は第十五号(明治二十年十二月)。復刻版・硯友社系雑誌集成1『我楽多文庫(活版非売本)』(ゆまに書

房、昭和六十年)を参照した。

『蝴蝶』 『国民之友』第三十七号付録(明治二十二年一月二日)の初出。復刻版『国民之友』(明治文献、昭和四十一年―四十二年)を参照した。

『妹背貝』 叢書『新著百種』第四号(吉岡書籍店、明治二十二年八月十二日)の初出。

『黒蜥蜴』 『文芸倶楽部』第一巻第五編(明治二十八年五月)の初出。

『浅瀬の波』 『文芸倶楽部』第二巻第十三編臨時増刊「小説六佳選」(明治二十九年十一月)の初出。

『蝗うり』 『文芸倶楽部』第一巻第四編(明治二十八年四月二十日)の初出。

『うらおもて』『国民之友』第二五九号付録(明治二十八年八月)の初出。

『ふところ日記』単行本初版(新声社、明治三十四年九月)。

『女房殺し』『文芸倶楽部』第一巻第十編(明治二十八年十月二十日)の初出。

二 本文表記は、句読点、符号、仮名遣い、送り仮名、改行など、原則として底本に従った。ただし、誤記や誤植、脱落と思われるものは、校注者による判断、および単行本や全集など他本によって訂正し、あるいは補った。その際、必要に応じて脚注で言及した。

1 句読点

(イ) 句読点(、。、)は原則として底本のままとした。

(ロ) 『硯友社文学運動の追憶』『嘲戒小説天狗』骨は独逸肉は美妙花の莢、莢の花『女房殺し』は、校注者の判断により適宜句間を空けた。

2 符号

(イ) 反復記号(ゝ、ゝ、ゝ)は原則として底本のままとした。

(ロ) 圏点(。・、)は、傍線などは底本のままとした。

(ハ) 「」「」(『』)『』(『嘲戒小説天狗』『妹背貝』の発話記号)は原則として底本のままとした。ただし、

『硯友社文学運動の追憶』では発話文における受けの括弧(「」)を適宜補った。

3 振り仮名

(イ) 底本の振り仮名は、本行の左側にあるものも含めて、原則として底本のままとした。ただし『妹背貝』

『黒蜥蜴』『浅瀬の波』『蝗うり』『女房殺し』は総振り仮名だが、読みやすさを考慮して適宜振り仮名を割愛し

た。

(ロ) 『ふところ日記』は、底本では部分的な振り仮名だが、初出『読売新聞』明治三十年一月十八日―四月十日(二日)を参照し、適宜振り仮名を加えた。

(ハ) 校注者による振り仮名は(ー)内に、歴史的仮名遣いによって示した。振り仮名の転倒や、送り仮名と重複している場合などは、校注者の判断によって補正した。

4 字体

漢字・仮名ともに、原則として現在通行の字体に改め、常用漢字表にある文字はその字体を用いたが、底本の字体をそのまま残したものもある。

(例) 燈(灯) 𪚩(翻) 龍(竜)

(イ) 当時の慣用的な字遣いや当て字は、原則としてそのまま残し、必要に応じて注を付した。

5 仮名遣い・清濁

(イ) 仮名遣いは底本の通りとした。

(ロ) 仮名の清濁は、校注者において補正した。ただし、清濁が当時と現代で異なる場合には、底本の清濁を保存し、必要に応じて注を付した。

6 改行後の文頭は、原則的に一字下げを施した。

三 本書中には、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句がある。これらは、現在使用すべきことではないが、原文の歴史性を考慮してそのままとした。

四 脚注・補注

- 1 脚注は、語釈や人名・地名・風俗など文意の取りにくい箇所のほか、懸詞や縁語などの修辭、当て字など、解
釈上参考となる事項に付した。
- 2 引用文には、読みやすさを考慮して適宜濁点を付し、句読点は原文通りとした。振り仮名は適宜加減し、原文
にある圈点や傍線は割愛した。漢文は可能な限り仮名交じりの読み下し文とした。
- 3 脚注で十分に解説し得ないものについては、↓を付し、補注で詳述した。
- 4 本文や脚注の参照には、頁数と行、注番号によって示した。
- 5 作品の成立・推敲過程上注目すべき主要な点に、他本との校異注を付した。
- 6 必要に応じて語や表現についての用例を示した。

『硯友社文学運動の追憶』『嘲戒小説天狗』『骨は独逸
肉は美妙』 花の莢、莢の花』『蝴蝶』の調査に関しては、小野めぐみ氏の
協力を得た。

『黒蜥蜴』『浅瀬の波』『うらおもて』『ふところ日記』の調査に関しては、木村友彦・槐島知明・金美亨・佐藤旅
人・姜政均・申鉉泰・頓野綾子・橋本由起子・浦山隆史・小木曾知子・小玉武志・鶴井和隆・高橋礼・中河内孝・姜
彦栄の各氏の協力を得た。

目次

凡例	3
硯友社文学運動の追憶	一
嘲戒小説天狗	九
骨は独逸 肉は美妙 花の莢、莢の花	二五
蝴蝶	三三
妹背貝	一五
黒蜥蜴	三七
浅瀬の波	二五
蝗うり	三五
うらおもて	三七

ふところ日記	三六五
--------	-----

女房殺し	四一九
------	-----

補注	四七五
----	-----

付録

『浅瀬の波』関連略図(洲崎周辺)	五四四
------------------	-----

『ふところ日記』関連略図(神奈川県三浦半島周辺)	五四五
--------------------------	-----

解説

硯友社の時代と山田美妙	五四九
-------------	-----

〈美術〉の時代と硯友社——小波・水蔭・曙山	五六一
-----------------------	-----

硯友社の内なる外部——柳浪と眉山	五七三
------------------	-----

丸岡九華

硯友社文学運動の追憶

山田有策校注

〔初出・底本〕大正十四年六月・七月、十五年四月の『早稲田文学』に連載。本文は部分的に振り仮名あり。連載第二回目・第三回目の表題は「硯友社の文学運動」。本巻ではその初出を底本とした。ただし、第三回の冒頭に第一回と同じように「記者」の言が記載されているが、この内容は不必要と判断し削除した。なお、『早稲田文学』連載時に掲載された写真は全て収録した。

〔諸本〕昭和二年五月に文芸市場社より『我楽多文庫』の活版公売本の第一号(明治二十一年五月)から第十六号(明治二十二年二月)までの十六冊が複製刊行された時、

その附録として『丸岡九華述 硯友社と我楽多文庫の由来』が添えられた。これは『早稲田文学』連載の第一回と第二回を合わせたもので、「完」となっているが第三回は削除されたままである。その後長らくこの本文は再録されたりすることがなかったが、『明治文学全集98 明治文学回顧録集(一)』(筑摩書房、昭和五十五年三月)に到ってようやく全文が収録されることとなった。これ以外は今のところ未収録のままである。

〔成立〕第一回の冒頭の「記者」の言にある通り、「硯友社文学運動の追憶」は丸岡九華の稿本「初蛙」によるも

のである。ただ、補注五に記載の通り、勝本清一郎によれば、この「初蛙」とは別にこれを口語体で書き直した稿本「初蛙」六卷(二十五字詰二十四行の原稿紙九二八枚)が残されている。これは勝本が「資料発表・明治文学史(1) 硯友社の発足」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和三十七年四月)で写真と共にその本文の一部を公開しているので確認できる。勝本は九華が明治三十九年五月から大正十五年三月まで二十年かけて口語体「初蛙」を完成させたと推定しているが、なぜ、それを『早稲田文学』に掲載しなかったのか、疑問が残る。

〔内容・評価〕題名通り、硯友社の文学運動の発生と展開を、同人であった者の回想として数かずのエピソードをまじえて語ったもので、きわめて魅力的な回想録となっている。特に同人たちの文体を『我楽多文庫』から具体的にあげながら語っているので、細部の間違いはあるものの、きわめて客観的なものとなっている。

〔校訂付記〕人名、作品名、『我楽多文庫』などからの引用には多くの誤りがあるが、全てを指摘することはさけ、明らかな誤りや誤植などは訂正した。

硯友社文学運動の追憶

丸岡九華

丸岡九華氏は、紅葉、美妙等と共に硯友社を創立された方ですが、氏はその創立当時を追憶して『初蛙』と題する長篇をものされました。これは当時の文壇を知る貴重なる文献であります。ゆく／＼は出版される御計画とのことですが、本誌の筆を贅し、こゝに転載することを許されました。……………記者

そも／＼硯友社なる一個の団体の起つて、明治の聖代に新文学の萌芽となり、当時の文壇に一異彩を放ちたる其起元を追想するに、今よりは二昔明治十八年の二月中^(なか)ばの事で東京大学^(とうきよう)及同大学予備門^(おなひび)の旧開成学校^(きやうけい)々舎の後をうけて、現今神田一ツ橋外高等商業学校^(しんじやう)の向側にありし時、同予備門に尾崎徳太郎^(おしき)、石橋助三郎^(いしはし)、山田武太郎^(やまだ)の三子が居つた。自分は此時予備門を去つて旧外国語学校^(こくご)附属高等商業学校に在学、外国語学校仏語科の知友に久我順之助^(くが)子あり、

一本名丸岡久之助(慶応元年(一八六五)一昭和二年(一九一七)。九花とも。江戸生まれの小説家、新体詩人。↓補一。

二尾崎紅葉(慶応三年(一八六七)一明治三十六年(一九一三)。本名徳太郎。江戸生まれの小説家。硯友社の創設者の一人でその中心人物。↓補二。

三山田美妙(明治元年(一八六七)一明治四十三年(一九一〇)。本名武太郎。東京生まれの小説家。流行作家となり硯友社を離脱。↓補三。

四明治十八年二月、尾崎紅葉・山田美妙・石橋思案・丸岡九華らが設立した日本初の文学結社。明治二十年代、文壇を形成し、大きな影響力を有し、多くの文学者を輩出した。↓補四。

五丸岡九華の「硯友社文学運動の追憶」の原稿本。大正十四年三月完成。↓補五。

六結果的には未刊のまま終わった。
七第二次「早稲田文学」(明治三十九年一月一昭和二年十二月のこと。↓補六。へ未詳。

八「起原」または「起源」の宛て字。以降この類の宛て字は頻出するが、いちいち注記はしない。
九明治十年設立の国立大学。のち帝国大学、東京帝国大学を経て、現在の東京大学となる。↓補七。

一〇明治十年の東京大学創立の際、その予備教育機関として東京英語学校と東京開成学校予科とを合併して設立。↓補八。三幕府の開成所を改称した国立の学校。↓補七。

一神田区一ツ橋通町(現千代田区一ツ橋二丁目あたり)。一四現一ツ橋通町の前身。↓補九。

一五尾崎紅葉の本名。↓注一。

一六石橋思案(慶応三年(一八六七)一昭和二年(一九一三)。横浜生まれの小説家。本名助三郎。↓補一〇。

一七山田美妙の本名。↓注三。

一八正しくは旧高等商業学校附属外国語学校。現在の東京外国語大学のこと。↓補一一。

同子と尾崎とは芝神明町^(しはしんめい)に居住せし以来の小学校友達なるが、前記の二月頃ある日学校にて、此度尾崎山田石橋三人にて文章研究の爲め、雑誌を作り各自に寄稿し批評して楽しみければ、君も好な道なれば是非賛成して来てくれぬかとの話に、それは面白からう 尾崎石橋とは旧知己なり 即時賛成すると其日学校の帰途、尾崎が下宿屋神田三崎町の石野方に赴きたり。

因^(ため)にいふ 是より以前、明治十六年の頃自分が発起して、文友会なるものを組織し、前田太郎香縁^(かうえん)、小沢徳太郎徳堂、安藤熊太郎胖水^(はんすい)、小川竹崖^(たけが)など、毎月一回自分が磯川の宅に集り来りて課題の漢詩文を持寄り批評添削し、それをばまた一小冊子に筆耕して会員の回覧に供せしことありしが、此折安藤の紹介にて尾崎も最初より此会に加盟せり、当時尾崎は縁山と号し、芝区神明町八番地荒木氏に寄寓し、石川鴻斎氏に師事して専ら詩文を研究せり。入会後は自分共時々会合して、互に研鑽をおこたらざりしが、此会約一年半ほどにて散会し続いて運動遠足を主旨とする凸々会なる者を組織し常に往来せしが其後此会も亦廃絶し尾崎石橋との交通も中絶せしが 余は一期先に予備門に入學し続いて尾崎石橋山田川上入學し、自分は去つて高商に移りたるより、同時に予備門ある事暫時に

久我龜石(元治元年(一八六〇)―大正十四年(一九二五))。紅葉の母方の祖父母の荒木家(芝神明町)の隣家の子。紅葉とは幼なじみで石川鴻斎(一四頁注一)の塾でも同門であった。また、紅葉結婚の時はそのなかだちとなった。

以上三頁

一芝区神明町(現港区浜松町一丁目・海岸一丁目)のあたり。

二神田区三崎町三崎座(現千代田区神田三崎町三丁目)。当時、紅葉は下宿屋「石野」の二階に住んでいた。

三語っている時点よりもさらに過去のことであることを示すため、二字下げの形をとった。

四九華の発起で月一回行われた漢詩文を中心とする批評添削の会。一年半ほどで解散。

五前田吟庵。生没年未詳。香縁情史。川上眉山の幼な友だちで硯友社の一員。大衆小説家前田曙山(明治四年(一八七二)―昭和十六年(一九四二))の五歳年上の兄。

六九華の、神田共立学校時代の友人。

七口語体「初娃」、筆写回覧本「我衆多文庫」目次では沖水(注)。九華の、神田共立学校時代の友人で、紅葉を文友会に連れてきた。ハ未詳。

八「石川」の漢語風の読み方。現在の文京区小石川三丁目の一。九華は雅号としても使用。

九紅葉の母方の祖父で漢方医の荒木舜庵。紅葉は明治五年、満五歳の時、母庸が没したためこの祖父母の舜庵とせいに育てられた。舜庵は近江の出身で京都で医学を修業したが、維新後は窮迫し、茶碗の上絵書きや寒暖計の目盛りを入れる内職をしていた。

二天保四年(一八三三)―大正七年(一九一八)。三河豊橋(現愛知県豊橋市)生まれの漢文学者。本名英。字は君華。別号、芝山外史、雪泥処士など。詩

して、暫く^(しばらく)会合の機なかりしに、此度^(このたび)久我子^(くがこ)の紹介により再度旧交を温むることゝなれり。

自分は一議に及ばず承諾して学校放課後久我子と同道して、神田三崎町なる尾崎が下宿屋石野方に赴けば、石橋も来合せたり。「やあよく来たね」、「面白い相談だ、直に賛成するよ」位にて、大安踞^(おほあく)に膝突合^(つきあは)す交際^(なか)。「君菓子でもおごつちあどうか」と客の方からの催促に、「仕方がない今日は出そうか」と、尾崎は机の抽斗より褌口探^(ふんどし)し出して、底をはたけば十錢銀貨と六七錢のばら錢、手を叩いて下女を呼べども一向に来ず、「仕方がない行て来やう」と、尾崎はてくく菓子買ひに行く。「ちよッ口には遣はれる奴さ」とは、石橋が主人を送る捨言葉^(すてことば)。室はたしかに北向の四畳半、窓の下に小机を置いて本箱二つに火鉢^(かまど)、炭斗^(たん)、洋燈^(らん)、壁に立かけたる握り太のステッキに肋骨の折れ出した洋傘^(か)、袴も帽も書籍も歯磨も手拭も、書籍も紙屑もこつちやに入乱れて、本函^(ほん)の蓋にも障子にも処嫌^(しやうけん)はずに狂歌詩都々逸^(きやうかしとと)を書散^(か)らして、天井裏の忠助と隣同志の為体なり。暫くして尾崎は、新聞紙に包みたるもの^(もの)を掲げて帰り来る。客は茶を呼び包を開く。見れば大福餅二十錢がところにて、折から山田も来合せたり、摘^(つま)んでは喰ひ取つては喰ひ、残り少く平げたる^(たひら)とき初めて談は結社の相談に

文書画を善くし、著書多数。紅葉、美妙はその門下生で、彼の崇文館で漢学や漢詩文を学んだ。三運動会、遠足会、演説会、詩読会、牛肉暴食会などを趣旨とする明治書生の遊びの会。世間の人間より一歩先に出るという意。
三 川上眉山(明治二年(一八六五)―明治四十一年(一九〇六))。大阪生まれの小説家。幼名幾太郎、長じて亮(あき)。別号烟波(えんぱ)散人、玄雪、黛子(はいし)など。石橋思案とは進文学舎の同窓。↓補一二。
四 高等商業学校(三頁注一四)の略名。
五 気の置けない仲間。
六 開いた形が囊(ヒキガエル)の口に似ていることから、そう呼ばれる口金のついた金入れ。
七 当時の下宿屋には下女(女中)がいて、さまざまな雑用に応じてくれた。
八 「ちよッ(「ちよつ」は、軽いあざけりの言葉。「口には遣はれる奴」は、口車に乗る奴、あるいは食べることとなると熱心な奴だ、の意)。以下、当時の典型的な書生の下宿の内部がきわめて写實的に描写されている。
九 炭を小出しに入れておく容器。炭入れ、炭かこ。三文明開化を象徵する物。ひろげた時、蝙蝠(こうもり)が翼をひろげた形に似ているところから。
三 和書を収蔵した縦長の箱。正面に上に持ち上げるふたがついていた。
三 狂歌と狂詩。「狂歌」は諧謔滑稽な感想を詠んだ卑俗な短歌。「狂詩」は同じ内容の漢詩や新体詩。
三 天保九年(一八三六)、都々逸坊間歌が潮来節を母胎として新たな作詩改曲した独立の歌詞。主として男女間の機微を七・七・七・五の口語にまとめたもの。
三 鼠のこと。「忠」にその鳴き声を掛けた。



我楽多文庫第一号

入る。

兎に角^(と)今^(い)回^(か)結^(く)社^(しや)の目的は、従来数度試みたるごとき詩、俳諧、歌など、一種^(い)類^(るい)に偏^(へん)することなく、凡^(お)そ文^(ぶん)筆^(び)の技^(ぎ)に属^(ぞく)するものは一切を網羅^(もうら)し、小説^(せうせつ)戯^(ぎ)文^(ぶん)詩^(し)歌^(か)都^(と)々^(ど)逸^(いつ)、川^(かわ)柳^(りゅう)冠^(かん)付^(つ)けに至^(いた)るまで普^(あま)く同^(どう)好^(こう)の作^(さく)を集^(あつ)めて、隔^(か)月^(げつ)に一^(いっ)回^(かい)之^(これ)を雑誌^(てい)体^(たい)のものに編^(へん)纂^(さん)して、投稿^(てうこく)同志^(どうし)の回^(かい)覧^(らん)に供^(こう)し、その編^(へん)纂^(さん)は山^(やま)田^(でん)尾^(び)崎^(さき)二^(に)人^(にん)に引^(ひ)受^(う)け、回^(かい)覧^(らん)の際^(とき)は批評^(ひひう)勝^(しょう)手^(てう)たるべしとの事^(こと)に定^(さだ)め、さて社^(しゃ)名^(な)雜^(ざ)誌^(し)名^(な)の問題^(もんだい)となつて種^(しゆ)々^(ささ)の議^(ぎ)論^(ろん)もあ^(あ)りたれど、必^(ひつ)竟^(けい)は文^(ぶん)筆^(び)の娛^(ご)楽^(らく)に^(て)して友^(とも)を嫌^(きら)はず雅^(や)俗^(ぞく)を併^(へい)列^(りやう)する雜^(ざ)誌^(し)はやけに「がらくた文^(ぶん)庫^(こ)」と、社^(しゃ)名^(な)は生^(き)真^(ま)面^(めん)目^(もく)に硯^(えん)友^(ゆう)社^(しゃ)とせん

写真 筆写回覧本『我楽多文庫』第一号(正しくは「第一集」の扉絵。中央に「我楽多文庫 毎月発行」とある。次頁の写真は同号(集)の扉裏に記載された、紅葉による口上と目次(補一二三)。なお、写真下の説明は底本のまま(以降も同様)。

一 この当時まだ坪内逍遙の『小説神髓』(明治十八年九月—十九年四月)は発表されていなかった。だから、ここであらう「小説」は逍遙の説く英國の「ノベル」と同等の「小説」、すなわち現実社会にうごめく人間たちの内部を描き出すという新しいものではなく、近世文学という小説「戯作(二稗史(は))」と同じ意味のものにすぎなかった。二 滑稽を主にした戯れの文章。

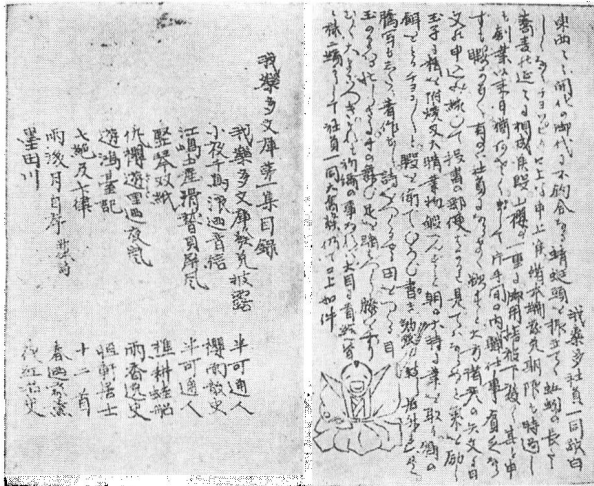
三 漢詩や新体詩や短歌のこと。

四 前付から独立した十七音の短詩。発句と違って切れ字や季などの制約がないため、江戸中期以降、隆盛となった。人情、人生、風俗などを扱い、滑稽、機知や諷刺が特徴。狂句。江戸中期の雑俳点者柄井川柳が代表的であることから「川柳」の名称が生まれた。

五 雑俳(ざはい) 前付から生じたさまざまな形式と内容の十七音の短詩で、点者が出した上五字すなわち冠に対し、中七字、下五字を付けて一句とするもの。笠付(かきづ)。

六 硯友社の機関誌『我楽多文庫』。のちに「文庫」と改題。さまざまな人間たちが自由に書いたものを雅俗を問わず収蔵した書庫の意。通算で四十三冊あるが、それは次の四期に分類される。
○第一期 筆写回覧本、八冊(第一集—第八集)、明治十八年五月—十九年五月。○第二期 活版非売本、八冊(第九集—第十六号、第十一号から「号」に改定)、明治十九年十一月—二十一年二月。○第三期 活版公売本、十六冊(第一号

かとの議に一決し「がらくた」を我楽多と万葉仮字に書改めんとは尾崎の考案にて、それなれば小説欄を心織筆耕、戯文新体詩の類を千紫万紅、狂歌川柳等を飛花落葉とする方更に面白からん、そこで雑誌が文庫なれば第一号第二号と呼ぶより、第一番第二番としてはどうか、それもよからう。横町の旭湯の



「我楽多文庫」第一号見返扉及目次(紅葉筆)

籠はいろは分になつて居る。い号ろ号も面白からう、へ号と号も洒落て居る、ちよッ下らん事を言ふな 尾崎がもつこ禪入れられてたまものか。社印は鉄筆家久我子に依頼し、挿画は大沢積翠君、(三之助と称して当時予備門の学生)に囑托し、是れにてひとまづ議一決 然して此発起者連が当時の戯号

第十六号、明治二十一年五月一二十二年二月。○第四期『活版公売本』、『文庫』と改題。十一月十号、第一号、第二号、明治二十二年三月十号。なお、筆写回覧本時代の『我楽多文庫』は現在所蔵が確認できない稀覯本で、丸岡九華所蔵のものは彼の死後、人手に渡った。↓補一三。七篠田鑑三の『明治百話』上(四条書房、昭和六年)は九華の談話、硯友社の創立話」を収めている。↓補一四。へ万葉仮名。漢字の音や訓を借りて国語の音を表記した文字。へしんしきひつかうとも。心で織りなした物語を筆にするの意か。色とりどりの花が咲きみだれるさま。蜀山人の狂歌狂文集『千紅万紫』(文化十四年)や統編『万紫千紅』(文化十五年)のもじりか。二花が風に散り、木の葉が散るさま。本来は世の移り変わりの無常さのたとえだが、ここにはそうした意味は感じられない。三書籍、古文書などを収蔵する書庫の意。現在、いわゆる小型・携帯用の文庫本のことではない。だから直後に「第一番第二番」などの言い方が出た。三銭湯で脱いだ衣類を入れる籠(かご)。「旭湯」については未詳。いさか下品な言葉遊びとなっている。三短い布の前後に紐を通して脇で結ぶ褌(はかま)。三篆刻師(はくし)。木、石、金に印をほる人。七大沢三之助(慶応三年(一八六八)ー?)。工学博士。明治二十七年帝国大学工科卒。宮内省内匠寮技師を経て東京美術学校講師。『我楽多文庫』筆写回覧本時代からの挿絵画家二人のうちの一人。鉛筆画が得意で、水彩画、日本画も描いた。

は、半可通人、素蕩夫、花紅治史、新中納言有海、枕之有明、縁山と記したるは尾崎にして、樵耕蛙船は山田武太郎、雨香と名乗るは石橋助三郎、桂堂または梅の舎、蕪とあるは自分のことにして、其後尾崎は紅葉山人、石橋が思案外史、山田が美妙斎美妙、自分が九華と改めたるは其後半年ばかりの後の事なり。

かくていよく出来上りたる第一号は、半紙半切を二ツ折にしたる小本にして、六七行に認めたるもの、まづ約束の心織筆耕には山田が堅琴草紙の初一回（英国史中のアルフレッド大王の伝記を、純然馬琴の七五調に書下せしもの）尾崎が江の島土産貝屏風（石橋、池田（氷山と号す）と三人連れにて、江の島記行を是亦純然膝栗毛風に綴りたるもの）石橋の沖千鳥島物語（前同様江の島記行、文体は普通の文体にて滑稽のもの）等なり、待ちにまちし甲斐あつて僅に三日間の約束に三四回の熟読、「面白いな」「よく出来たな」とは逢ふ度の挨拶、真に寝食を忘るとはこの時の心持なりけり。初一番より第八番まで、尾崎山田二人にて筆耕せしもの、今も尾崎方に珍藏しある筈なり。今この初号に掲げたる尾崎が披露の文。山田が綴りたる祝文、幸に筐底に写しあれば、記して当時の文体を示す。

一以下は尾崎紅葉の戲号。「枕之有明」は「枕下（本）有明」。二山田美妙の戲号。

三石橋思案の戲号。四丸岡九華の戲号。

五半紙二つ切りの大きさ、現在B六版よりやや大きめで、それを二十枚か三十枚綴じ合わせたものだったが、印刷するようになってからは四六版三十二頁となり、一般販売（十六頁注六）するようになってからはその二倍の大きさで、十二頁や十六頁になつた。

六山田美妙の処女作。『我楽多文庫』第一集明治十八年五月と第二集（同年六月）に連載したもの。↓補一五。

七At the Great と称されるウエセクス王家のイングリッド王（四九八、在位七一一九）。

八曲亭馬琴（明和四年（一七六七）嘉永元年（一八二〇））読本・合巻作者。本姓は滝沢氏。名は興邦（きさけ）後に解（き）。

代表作に『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』などがある。↓補一六。

九『我楽多文庫』第一集から第八集まで連載。未完。↓補一七。

一〇池田賢太郎。生没年未詳。陸軍技監・工学士。別号、研池、瓢亭木菓子。

大学ではボートの選手で、学生時代には彼の住んでいた小田原に紅葉・思案・眉山らがよく避暑に來た。

二一返舎（一九明治）『東海道中膝栗毛』二十編四十三冊正編八編、続編十二編、『続膝栗毛』二十編四十三冊（昭和二年（一九二七））文政五年（一八一三）刊。

駿河生まれの江戸者弥次郎兵衛と喜多八の滑稽な道中記。三補注一三の目録には見当たらない。

四正確には「第一集より第八集まで」。

五竹籠の底。

六「傲を飛ばす（自分の主張を広く人々に知らせて同意を求める）ように言うのは少し大仰」（大げさすぎる）の意。